

第20回日米文化教育交流会議（カルコン）共同声明（仮訳）

2001年5月10-11日

ロス・アンジェルス

日米両国の政府、財界、学界、その他の種々の分野の代表からなる日米文化教育交流会議（カルコン）は、2001年5月10、11の両日、カリフォルニア州ロス・アンジェルスロサンゼルスの全米日系人博物館において、第20回合同会議を開催した。

パネル委員は、合同会議の会場を提供してくれた全米日系人博物館に深謝の意を表した。

第20回合同会議の議長は、本間長世教授（成城学園長）とリチャード・J・ウッド博士（President, United Board for Christian Higher Education）の両名が務めた。

パネル委員は、カルコンを代表して本間、ウッド両パネル委員長のリーダーシップと努力に感謝の意を表した。両委員長はカルコン委員長を引退する事を表明している。

カルコンは、池田総理大臣とケネディ大統領の合意によって1961年に発足して以来、日米関係の基盤となる文化、教育の分野のきわめて重要な諸事項に関し、両国における官民各層の関心を喚起する役割を担ってきた。

合同会議には小泉総理大臣とブッシュ大統領から祝賀のメッセージが寄せられたが、いずれのメッセージも会議の開催地としてロス・アンジェルスロサンゼルスの全米日系人博物館が選ばれたことの意義に留意したものであった。両首脳はそれぞれ、日米関係にとってカルコンの活動がますます重要になりつつあることを強調した。

教育交流

パネル委員は、両国間の相互理解の向上とより緊密な関係の構築のために、日本で学ぶ米国人学部学生数の大幅な増加が必要であるという確信を新たにした。これは、1991年以来、カルコンにおける優先事項の一つであった。パネル委員は、日米両国において、この分野で過去数年にわたって見られた進展に留意した。また、この分野で著しい進展をもたらした、多くの政府レベル、非営利および民間の団体の努力が、今後も継続されるべきであると強く奨励した。パネル委員は、第21回合同会議において今後の進展を報告するよう要請した。

米国教育省と文部科学省は、両省が開始した教育に関する研究についての進展を報告した。文部科学省は、特に数学と科学において能力の高い学生の教育を研究することを提案し、教育省はそのような研究が日本の研究者によって促進されることを望む旨を表明した。教育省は、米国の研究者が、日本の小中学校における数学の効果的な教育戦略に焦点をおくことを希望するであろう旨を示唆した。

図書館協力と情報アクセス

北米日本研究資料調整協議会（NCC）と、国立大学図書館協議会（ANUL）は、両国間におけるドキュメント・デリバリー・サービス(DDS)と相互貸借（ILL）を向上させるために行ったパイロットプロジェクトについて共同報告を行った。

文部科学省はこのプロジェクトを強く支持する旨表明し、パイロットプロジェクトが成功裡に完了したことを歓迎した。

NCCはさらに、書誌やテキストに関するデータベースへのアクセスや広範な利用者に対するサービスに関する対策を含め、他のいくつかの分野においてもかなりの進展があったことをコメントした。

日米両パネル委員は上記の点に関して、この分野の専門家達による両国における進展を強く認識した。

カルコンパネル委員は、グローバルな DDS/ILL の十分な実現と、その他の図書館協力に関する作業を奨励し続けることを決議した。また、カルコンパネル委員は、図書館関係者間の協力と具体的な成果を強調した。パネル委員は第21回合同会議において今後の進展を報告するよう要請した。

美術展

日本側パネルは東京の国立西洋美術館において同時に開催される2つのアメリカ展、“A Brush with History（筆が語る歴史）”と“American Heroism（アメリカン・ヒロイズム）”ならびに付随した文化・教育プログラムについて報告した。両展は2001年8月6日から10月14日まで開催される。両国パネルは第19回合同会議において当該プロジェクトを支持し、これまで出展作品の貸与の確保に協力してきた。

デジタル・カルチャー

第19回合同会議は、インターネット及びウェブをベースにした新しいマルチメディアテクノロジーの力を、二国間の教育文化関係向上への努力に利用する可能性を探るため、新しいワーキンググループの設置を提唱した。

デジタル文化ワーキンググループは、教育・文化面に重点を置いた過去50年間の日米関係に関する教育リソースのインターネット上での構築の進捗状況について報告を行った。ワーキンググループは、過去半世紀の日米の社会と文化の相互影響関係が提示されるよう設計された、テキスト、音声、映像要素を含むデジタル教材のアーカイブを提唱した。

パネル委員は「クロスカレンツ」と題された、このウェブベースのリソースのプロトタイプを視聴し、カルコンデジタル文化ワーキンググループとプロジェクトチームのメ

ンバーによる作業を賞賛した。パネル委員は、その革新的な多くの特徴について議論し、また、ワーキンググループにより提案された本格的なウェブサイト開発計画における資金面での実現の可能性を検討した。

パネル委員は、プロトタイプの開発が二国間の協力の下に進められたということ自体が特筆に値する旨を述べた。パネル委員はまた、このようなリソースのグローバルな影響力の潜在性を強調した。

今後の開発について、パネル委員はカリキュラム開発の必要性と、とりわけ学術専門家の指導のもとでリソースに取り込まれるべき内容の質を確保し、内容を充実させることの必要性を指摘した。

カルコンの任務と施策

パネル委員は、「21世紀の最初の10年におけるカルコンの任務と施策」（別添）について討議した。

パネル委員は、カルコンの活動に関するテクノロジーの変化の影響力について討議した。また、パネル委員は、パネル委員自身や事務局間のコミュニケーションを円滑にするため、テクノロジーを活用するよう努力することに合意した。

パネル委員はまた、カルコンがシンポジウムの開催、意見や提案の提示その他適当な方策によって日米両国におけるビジビリティを高めるよう努力することを提言した。

今後のカルコンについて

パネル委員は、第21回合同会議を2003年秋に、また第22回合同会議を2006年春に開催するとの提案に同意した。これは米国大統領就任年における合同会議の開催を避けるための措置である。

パネル委員は、グローバル時代における人材育成の重要性を認識し、事務局を通じて国際理解のための若者交流と教育に関する情報交換をすることに同意した。

パネル委員はまた、デジタル文化リソース(DCR)の更なる日米共同開発を支持した。パネル委員は、デジタル文化ワーキンググループの作業が資金と人員が許す限り段階的に進められるという了解の下、活動継続の提案を支持した。

デジタル文化ワーキンググループは、引き続きデジタル文化リソース(DCR)の運営とコンテンツをモニターする。

パネル委員は、デジタル文化ワーキンググループが第21回合同会議で、DCRの今後の進捗状況を報告するよう求めた。

パネル委員は、第21回合同会議が2003年秋に日本で開催されることに合意した。

以上